

## 編集後記

ここに、びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第18号をお届けいたします。本号には、特別寄稿1編、課題研究論文5編、自由研究論文が6編、研究報告が2編、が掲載されており、本学の学術を代表する研究報告が納められております。本号を発刊するにあたり、ご協力を賜りました皆様には、改めて厚くお礼申し上げます。誠に、ありがとうございました。

さて、思い返せば、この1年間は、本当に大変な1年間であったと誰もが思っておられることと存じます。新型コロナウイルスの感染は、想像以上に急速拡大し、世の中の情勢は自粛モードに震撼されることとなりました。本学の授業形態においても遠隔授業が当たり前となり、その中であって一部の授業は間隙を縫って対面形式で開講するといった、これまで想像もしなかった事態に至っています。「これからどうなるのだろう」と、深刻な不安と対峙しながら、今後も毎日の生活を過ごさねばなりません。本当に、大変な世の中となりました。

このような世情の中にあって「スポーツ学はどのように役立つのか」。本号では、このような根源的な不安に対峙する企画を盛り込むことと致しました。すなわち、新型コロナウイルス感染拡大の最中であって「スポーツって役立つのか」「スポーツ学は世の中にどのように寄与できるのか」という素朴な疑問に寄せられたエッセイを掲載し、いわば、スポーツ学徒の悲鳴、嘆き、心の叫びを残そうと思立ちました。これを敢えて「課題研究論文」と致しました。どれも興味ある論考となっております。ご一読いただければ幸甚です。

言わずもがな、東京五輪は1年間の延期となり、オリンピックもまた心の叫びと日々闘いながらの毎日を過ごしています。「本当に、オリンピックは開催されるのか」4年間、否、5年間にもおよぼ百折不撓を乗り越え、人生の集大成を迎えるべきオリンピックの心持ちを察すには余りある1年となりました。

そのように考えると、人は人と支え合いながら、この難局を乗り越えていくことが不可欠であるといえるでしょう。未曾有の危機に瀕するこの世代を、お互いが尊重し合い、慈しみ合いながら、皆様とご一緒に歩んでいくことで、次の世代に「新しい何か」を継承していくことに繋がるのだろうと思うのです。

本号を発刊するにあたり、投稿者をはじめ、査読および編集作業にご貢献いただきました先生のお名前を列挙し、ここに感謝を申し上げます。

編集協力者氏名：石井 智、大西 祐司、北村 哲、黒須 朱莉、坂尾 美穂、渋谷 俊浩、城島 充、高橋 佳三、高松 靖、多賀谷 智子、竹川 智樹、武田 哲子、佃 文子、豊田 則成、中野 友博、中道 莉央、西条 正樹、林 綾子、林 弘典、村瀬 陽介、山田 庸、山手 隆文

びわこ成蹊スポーツ大学 図書・学術委員会 委員長  
兼 紀要編集専門委員会 議長  
豊田 則成